〝荒尾刀〟ここに在り。

刀匠 松永源六郎さん

「テレビの時代劇では、刀で次々に人を殺していますが、本来刀は攻める武器ではないんです。何しろ、ちょっと刃が触れただけでザックリ切れるんですから、相手と刀を交えるときは、自分の死も覚悟の上。家長が死んでしまうと一族も滅ぶわけで、そんな事を起こしてはならない、という守りの意味があったんですよ。」

荒尾市の刀匠、松永源六郎さん(40)は静かに語り出した。

彼は刀しか作らない。

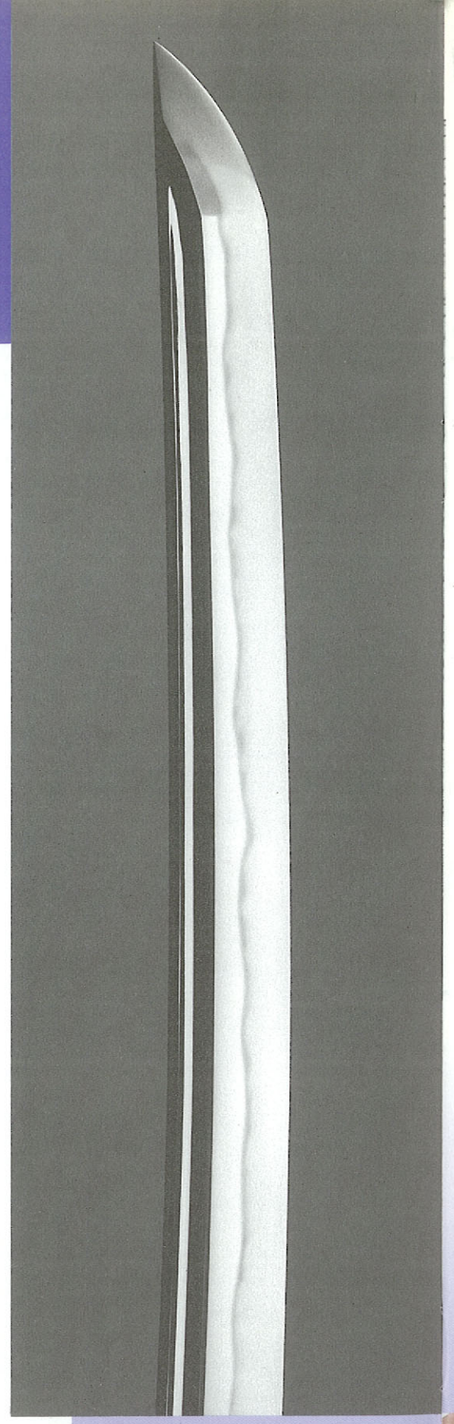
「片手間に刀を作ってると思われたくないし、正直いって他の物は作る気がしないんです。」純粋に刀だけに向かい合っている人生なのだ。「良い刀を作って金を儲けたいとか、賞をねらいたいとか、そういう思いがチラリとでもよぎったら、必ず失敗します。不思議でしょう。刀には作る者の魂が反映されてしまうんでしょうね。」

愛刀家の父の影響で、子供の頃から刀を見て育った。二十五歳の時、鑑定の勉強でもと刀を尋ねて歩くうち、たまたま立寄ったのが荒尾市の刀匠川村清さんの家。そこで日本刀が作られるさまを初めて目の当たりにし、大きな衝撃を受けた。

「とにかく、いても立ってもいられなくなり、翌日には川村さんの仕事場におしかけていました。」

昼は修業、夜は生活のための仕事、という毎日。ただ、がむしゃらなだけの日々が六年間続いた。

こうした中で、二人目の師匠小林友紀さんと出会う。そして『日本一切れる刀を作る男』と言われた小林さんの住む山梨県まで、足しげく通う事となる。「刀匠といえば世襲がほとんどなのに、私は初代でしょう。苦労は多かったですよ。全国を歩き回ったものですね。刀作りの極意は、いっさい跡を残さないように口伝による場合が多いんですが、それだけはどう頭を下げても教えてもらえなかった……。」



独立して5年間は、思うような刀ができず、やけになったこともあったという。もう作るのはやめようかと弱気になっていた時、名刀展入選の通知が来た。昭和58年のことだ。それ以来、毎年連続入選という快挙を続けている。〝初代〟というハンディを、見事に乗り越えてしまったのだ。

〝破邪〟とかかれた薄暗い仕事場。火花が飛び散り、刀に魂が刻み込まれていく。一振りの刀を作るためには、30kgもの砂鉄が必要だ。近くの関川の底から、強力な磁石を使って集めてくる。そして、火。なんと、60俵もの炭が使われる。人と鉄と火と、三者が一体となって生み出される。まさに芸術品だ。

「もともと荒尾の小岱山付近は、古代から製鉄が行われていた所。遺跡もたくさん残っているし、独自の〝火の文化〟が育ってきた土地柄です。私の仕事も、その延長上にあると考えています。だから、小岱山の山すそに仕事場を作るのが夢なんです。ここだけの文化、埋もれさせたら、いけない。」

刀の茎(なかご)に〝小岱山麓住清継作〟と銘を刻むのも、そんな想いの表われなのである。帰り際に、刀を持たせてもらった。鋭い光を放ち、ずしりと重い。息をのむような緊張感。

「その刀は、去年の作品。次に来ていただいた時には、もっと良いものをお見せできると思います。」

納得のいく物しか作らない。常により高い領域を目指す――松永さんの刀作りに〝完成〟という文字はないのかもしれない。

■松永源六郎略歴
昭和23年大牟田市生まれ
師承・川村清(刀銘・清平)
昭和53年製作認可受(刀銘・清嶽)
昭和58年新作名刀展初入選。以後6回連続入選。
全日本刀匠会会員。つくし剣工会会員。